１９４４年（昭和１９年）

昭和東南海地震の被災体験記録

昭和１９年１２月７日午後１時３５分頃、熊野灘を震源として発生した昭和東南海地震は、三重県や愛知県、静岡県を中心に甚大な被害をもたらしました。しかしながら、戦時中の情報統制下において発生した地震ということもあり、被害の全容が明らかにされているとは言い難い状況です。

そこで、三重県では、被災された方から当時の体験談を聴取し、被害の状況を絵画で描くことにより、従来の震災記録とは違った、分かりやすい震災記録を作成しました。この記録集では、平成１８～２０年度に実施した聴き取り調査結果から、１２名の被災体験の概要を紹介しています。

三重県は、近い将来に東海・東南海・南海地震の発生が危惧されています。この記録集では、昭和東南海地震を体験した人が、地震をどのように感じ、津波からいかに避難し、被災から立ち直っていったか等を絵画を通して描いており、今を生きる私たちが学ぶべき教訓が記されています。

本調査の実施にあたりましては、名古屋大学　環境研究科　助教　木村玲欧氏（現兵庫県立大学　准教授）、同　林能成氏（現　関西大学　准教授）、画家の藤田哲也氏、阪野智啓氏のご協力をいただきました。

地震の規模　Ｍ７．９		
震央位置～統計 136.6 度、北緯 33.8 度（熊野市東方約 60ｋｍ地点）		
死　　者	３８９人	◆被害の特徴 地震により大津波が発生し、津波の高さの最大は尾鷲市賀田の 9.0mであった。 津波による被害は、三重県と和歌山県に集中した。 特に尾鷲町・南輪内村（現、尾鷲市）、錦町（現、大紀町錦地区）、吉津村・島津村（現、南伊勢町）、二郷村・長島町（現、紀北町紀伊長島区）などで大きかった。
負　傷　者	６０８人	
住　家　全　壊	１，６３７棟	
住　家　半　壊	４，２１７棟	
非住家全壊	１，１０３棟	
非住家半壊	２，２９９棟	
家　　屋	２，７５９棟	
浸　水　家　屋	７，５７９棟	

「津波調査報告書～検証・東南海地震～」（平成７年１０月　三重県発行）を参考に作成

（本記録集の発行：三重県防災危機管理部地震対策室　TEL059-224-2184　平成 24 年 3 月発行）

北牟婁郡二郷村名倉で被災したＡさんの体験

地震のあと、弟と海を見にいった。最初、潮が引いたが、その後すごい勢いで潮が押し寄せてきた。ぎりぎりのところで山に逃げることができた。

集落のほとんどの人が高台に逃げることができたが、一部の人は物を持ち出すのに手間取り津波に飲み込まれてしまった。高台から、大声をかけたけれども、伝わらなかった。

津波のあと、2、3週間は高台にあった遠い親戚の家に泊めてもらった。狭いところにたくさんの人が寝泊りし、そこから自宅の片付けなどに出かけた。

近所のほとんどの家は、引き波で持っていかれたが、私の家は家財道具が流されるくらいで済んだ。先祖が津波のことを考えてあらかじめ土地を高くして作ったことで助かった。

家に出入りしていた船員の人が家の後片付けを手伝ってくれた。我が家は父が戦争に行っていて男手が足りなかったので、大変助かった。

（絵：藤田哲也）

北牟婁郡二郷村名倉で被災したＢさんの体験

道を歩いているときに東南海地震が発生した。揺れが強く５分くらいは地べたにしゃがみこんでいた。しかし、地震ではまわりの家は一軒も倒れなかった。

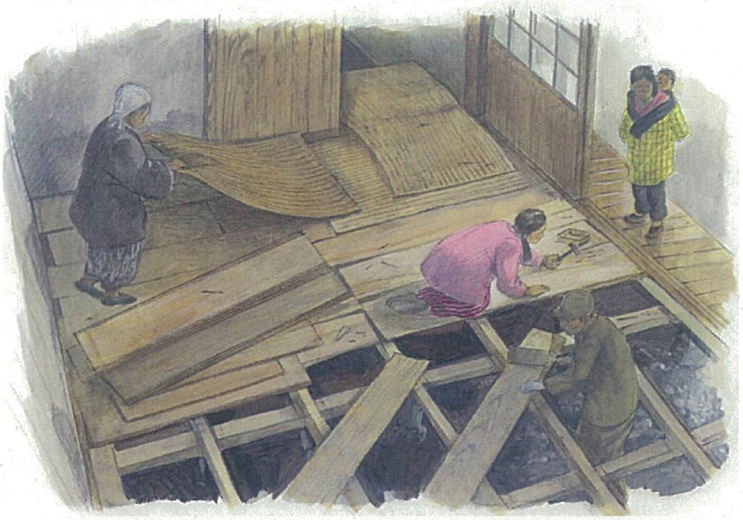
津波をよく知らなかった母と２人で海を見にいった。近所のおじいさんが「津波がくるから逃げろ」と言いながら通りかかったので、しぶる母を説得した。

すぐに取れるところにあった配給米を持って、家のすぐ裏に山へ母と一緒に逃げた。

母が位牌を忘れたというので、私が取りに帰った。位牌をとって外に出たら、もう津波が迫っていた。近くにあった木にとびついて、かろうじて津波に流されずに済んだ。

集落のほとんどの人が高台に逃げることができたが、一部の人は物を持ち出すのに手間取り津波に飲み込まれてしまった。高台から、大声をかけたけれども、伝わらなかった。

自宅は津波で壁などが破壊されて、柱と屋根だけになってしまった。室内にはごみがたくさん入りこんで、片付けがものすごく大変だった。



隣の家は被害が軽かったので、床板をはり、むしろを敷けば住むことができた。好意でそのうちに４、５日泊めてもらい助かった。

山の方に住んでいたおじさんが、布団や畳を荷車で運んできてくれた。津波で全てダメになってしまっていたので、とても助かった。

津波から２、３日後には、青年団などが来て片付けを手伝ってくれた。しかし使えるものでも壊してゴミと一緒くたにされた。

津波で流されたカキのいけすが２ヶ月くらいして発見された。引き取りに行ったら、そこには道具を準備してカキ泥棒している人がいた。

（絵：藤田哲也）

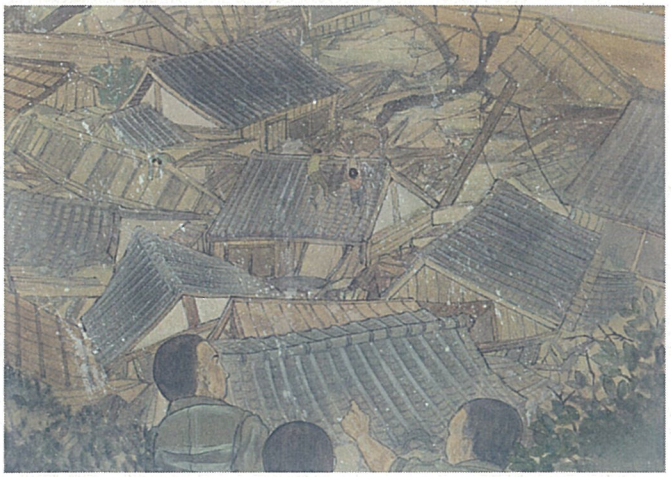
名倉集落の全景

度会郡吉津村神前浦で被災したＣさんの体験

授業中に東南海地震が発生した。先生が「机の下に潜れ！」と言って真っ先に潜り、机の中から指示を出していた。とりあえず、皆、机の下に潜ったが、隣の机をずらしたりして遊んでいた。

「津波が来るので逃げろ」と校長先生が指示を出し、少し離れたお寺に行くように言った。私は「早く高いところで津波を見たい」と思ったので、学校の脇にある崖をよじのぼった。

山の上まであがると、既に津波が押し寄せてきていた。家が押し流されて、次々と壊れていった。足元の山に家が次々とぶつかり、バリバリというすごい音が聞こえた。

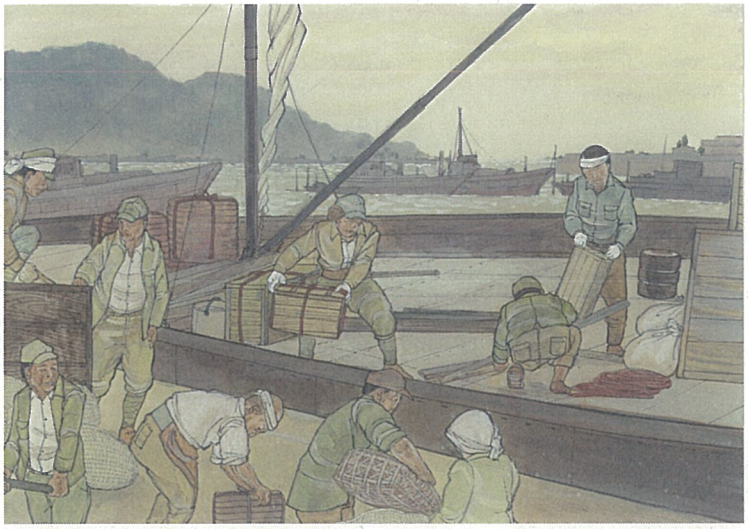


家に帰ろうと一度山を降りたが、家が押し流され、材木などがグチャグチャに山積みになっていて、とても歩くことはできない。もう一度、山に登って尾根伝いに歩いた。

自宅は津波で流されてしまったが、船が無事だったので、その晩から船上で生活するようになった。はじめのうちは漂流物に当たったり、余震で揺れたりしたので、よく眠れなかった。

壊れた自宅にあった井戸は、津波の後も潮が差さなかった。そのため周囲に共同バラックをたくさん建てられてしまい、自分の家を再建することができなくなった。

津波のあと、食料の確保に苦労した。戦争中だったので不発弾を海の中で爆発させて魚をとったり、海草を乾燥させたりして食べるのに一生懸命だった。



別の場所に土地を買い、新しい家を建てた。物資不足の時代だったが、父が運搬船をやっていたので、そのルートを使って材木などの資材を集めた。

（絵：阪野智啓）

北牟婁郡錦町で被災したＤさんの体験

地震の揺れがはじまった。天井が落ちてきても大丈夫なように、母親の「たんすの前に座れ」という声に従った。しかし揺れは長く続き、だんだん強くなってきてたんすもガタガタ揺れだしたので、外へ出た。

たくさんの人が海岸通りに出て、なかには昔からの言い伝えで「世直し、世直し」と叫んでいる人もいた。通りには３本の地割れが走っていた。

「津波やぞ」という言葉を聞いて、急いで家に帰って避難の準備を始めた。母親は「位牌を持ってこい」とか「米を持ってこい」と私に言ってから先に逃げた。

避難の準備をしてから高台に向けて逃げ出した。振り返ると波と船が自分に向かって近づいてきていた。慌てたてしまったためか、なぜか階段を上らずに、がけをかけあがって高台に登った。

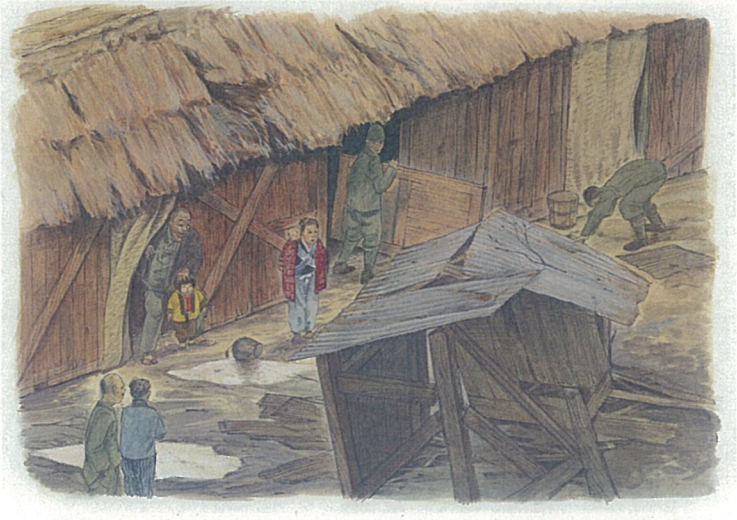
母をはじめ町の人は山の奥の方まで逃げたが、私は山の際のところで、津波と町を見届けた。町全体が湖のようになっていた。

漁業組合の建物はしっかりしており、２階は無事だった。漁協関係者の家族５世帯くらいが、しばらくの間、ここに避難して生活した。

津波の３日後くらいから、小学校の子どもたちを連れて後片付けや瓦拾いをした。いたずら盛りの年頃なので、片付けはなかなか進まなかった。

多くの人が津波で亡くなり、しばらくの間、水死体があがってきた。流された死体があがったと聞くと、いくら止めても、子どもたちは死体を見にいった。

小学校の農地をつぶして教員用のバラックが建ち、そこに入ることができた。粗末なつくりで、台風では共同トイレが飛ばされるようなところだった。



（絵：藤田哲也）

現在の錦地区の様子

北牟婁郡錦町で被災したＥさんの体験

「まずは潮が引いてから津波が来る」と聞いていたので、大きな横揺れが続く中を浜まで行ってようすを見た。しかし、潮が引く気配はなく、家に帰った。

家で寝ていたら「水が来た」という声が聞こえ、外へ飛び出した。逃げたはずの足の悪いおばさんが、まだ道をうろうろしていたので、背負って高台にある小学校まで運んだ。

「津波を見る」ために浜へ戻る途中で、小さな子どもを連れた近所の女の人に会った。「子どもを助けてくれ」と言われたので、子どもを抱き、その人の手を引っ張って再び高台にある小学校へ向かった。皆、半信半疑でわからないままに歩いている感じだったので、慌てている人はいなかった。

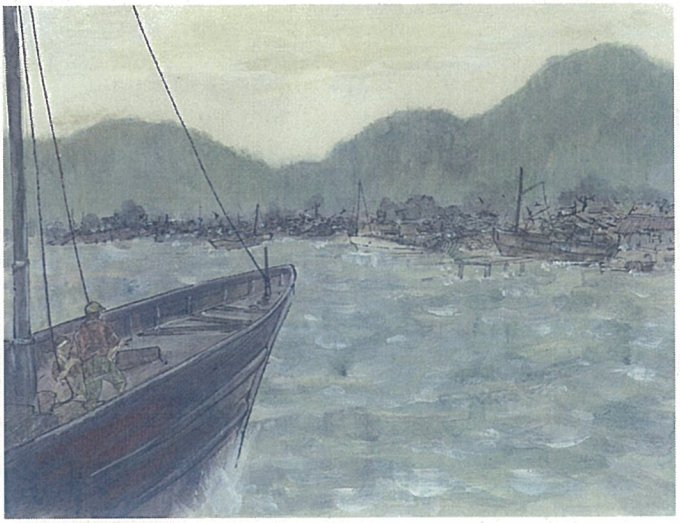
再び津波を見ようと浜へ向かったところ、波も水も見えないのに、家が動いて自分の方へ迫ってきた。その直後、津波に押し流された家同士がぶつかり、ものすごい音とともに土煙があがった。

命からがら山へ登ったら、眼下の町は一面の海になっていた。頭は真っ白でぼう然としてしまい、恐怖心はなく、家族のことも考えられなかった。

しばらくすると引き潮が始まり、 ガレキや船を巻き込んだ茶色のにごった水がものすごい勢いで引いていった。今まで見たことがなかった湾の底が見え、湾の真ん中だけが水が残って水たまりのようになった。

津波は何度もやってきた。何回目かの大波で家が打ち寄せられ、屋根瓦が動いて中から頭が見えた。ぱっと駆け寄り、同じ場所にいたもう一人の人と協力して、中に居た老夫婦を助け出した。

山の方から水が流れてくるためか、井戸は無事で水には困らなかった。しかし、衣服や布団、履物などの入手には苦労した。バラック生活はとても寒く、木屑をもやして暖をとった。



尾鷲で食料などの配給があった。青年団を代表して、船で救援物資をとりに行った。

自分たちで地上げを行い、元の道路から１mほどかさ上げした後に家を建てた。当時、ブリが大漁で儲かり、その金で家を新築することができた。

（絵：阪野智啓）

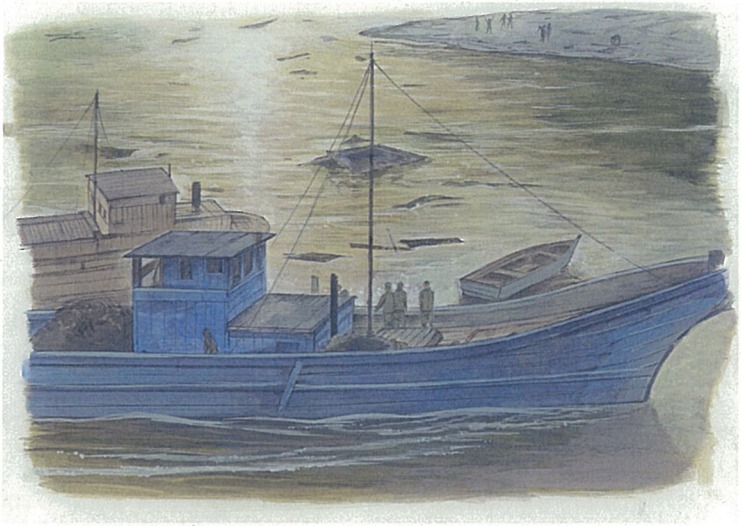
度会郡吉津村神前浦で被災したＦさんの体験

地震から１２～１３分すると、潮がじわじわと上がってきた。水に浸かって網が重くなると具合が悪いので、皆で石垣の上へ網を上げ始めた。

水はどんどん上がり、平坦なところまできたら突然速さを増して近づいてきた。一斉に逃げ出し、一番若かった自分は先頭を走った。40 代、50 代の人たちは死にもの狂いでついてきた。

海が落ち着いてから海岸に戻り、集落を見たら、家などがすっかりなくなっていた。仲間のところに戻って話をしても、誰も信用してくれなかった。

自分たちの船は沖に流され、網が錨にからんで沈みかけていた。通りかかった漁船に網をはずしてもらうよう頼んだが、うまく伝わらずに船は沈んでしまった。



歩いて集落に戻ろうとしたが、途中の橋は津波で破壊されてしまい渡れなかった。上流の橋まで遠回りした。

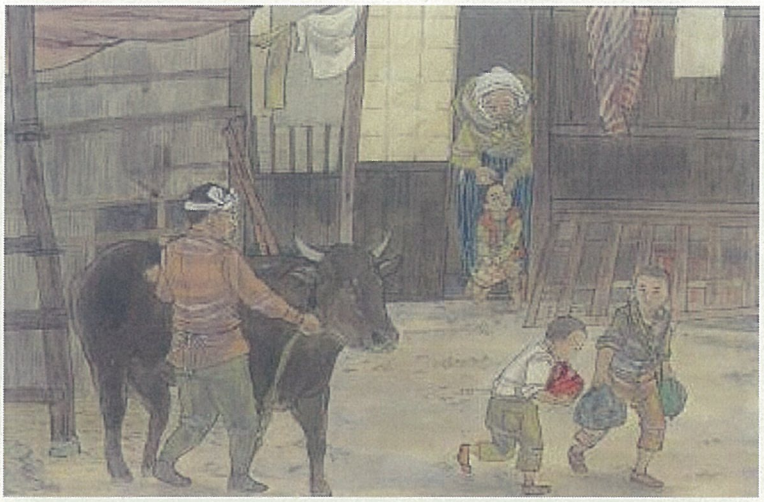
家に戻る途中、津波で流された人を助けた。意識がなかったので、近くのお寺まで運び和尚さんに介抱をお願いした。

二階建ての自宅は流されて一階がつぶれ、残った二階が通り道のようになっていた。部屋にあった額縁などは盗まれてしまった。

２～３年後、自分の山から木を切り出し、壊れた家の使える材料も使って家を建てた。集落で一番早く、まわりはまだバラックばかりだった。

（絵：藤田哲也）

度会郡島津村古和浦で被災したＧさんの体験



地震の後、漁師たちが「津波が来る」「逃げろ」と騒ぎ出したので山側にあった畑から自宅へ戻った。父は牛を高いところへ逃がし、自分達も手荷物を持って高いところへ逃げた。

おじいさんはサトイモを隠してから逃げようと考えたらしく、川を少し上ったところにあったイモ穴に１人で行ったあとで、自宅へ戻ろうとした。

避難した高台から津波が襲来するようすを見ていた。おじいさんは畑まで戻ったときに津波に飲み込まれ、すぐに姿が見えなくなった。

港に停泊していた無人の漁船が、家々をなぎ倒しながら駆け上っていった。家はドミノを倒すように簡単に倒れていった。

内陸の集落から消防団がまとまって来てくれて、津波の後片付けを手伝ってくれた。壊れて使えなくなった家は、急所をのこぎりで切り、ロープをかけて皆でひっぱって壊していった。

津波のあと、なぜか伊勢エビが大漁に獲れた。農家だったのでサトイモなどと物々交換して、１ヶ月くらいの間、毎日のように今まで食べたことのないエビ汁を腹いっぱい食べた。

津波のあと、ほとんどの井戸に潮が差してしまい、水には困った。たった一軒だけ水が出る井戸があり、皆、そこの家に水をもらいに行った。

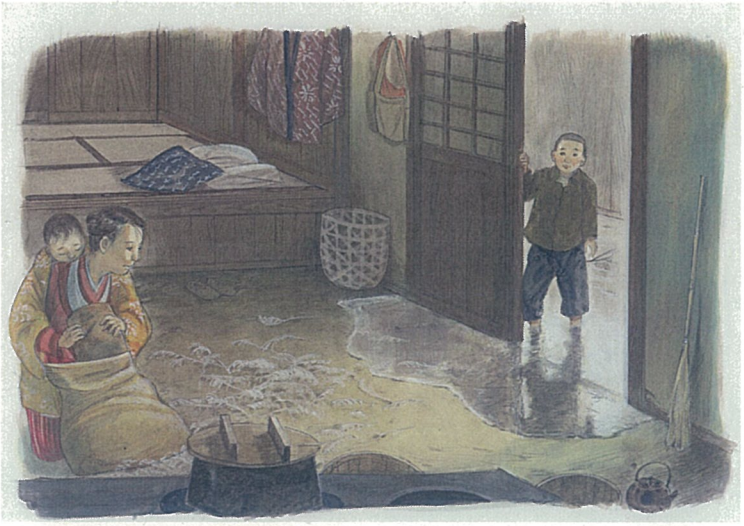
津波後にバラックがたくさん建てられ、そこに入った。家の再建が進むにつれて、だんだんと空家が出てきたので、空家をつなげて増築を繰り返しながら５～６年はバラックに住み続けた。

（絵：阪野智啓）

北牟婁郡錦町で被災したＨさんの体験

となりの子と２人で、山へススキの穂を採りに行っているときに地震が起きた。「敵の飛行機が来た」と思って伏せようとしたら、揺れがどんどん大きくなって、ガケからは石が落ちてきたりして怖かった。

津波の話は聞いたことがなく、「家で母親が待っている」と思って海岸沿いの自宅へ走った。自分の母も、となりの子の母も待っていたが、となりの家の人たちはその後すぐに避難した。



母はススキの穂を袋から取り出し、袋に米を入れはじめた。そんなことをしているうちに、自分の足元まで水が迫ってきた。

急いで家を逃げ出したが、みるみる水位が上がってきたので、曲がり角の家の中へ逃げ込んだ。その後も水位は上がり、家に閉じ込められてしまった。

意識が戻ったら戸板の上に乗って流されていた。パンツ１枚になり、海に飛び込んで、山の脇の道まで泳いだ。

山仕事から帰ってきた人がたまたま通りかかり服を着せてくれた。その後、避難所になっていた小学校まで連れていってくれた。

その日の夕方になって、避難所の小学校で父や母をはじめ家族全員と再会することができた。

（絵：藤田哲也）

現在の大紀町錦地区の様子

南牟婁郡南輪内村賀田で被災したＩさんの体験

職場で地震が起きた。はじめは机にもぐって脚を持っていたが、揺れが収まらない。家にいる高齢で体調の悪いおばの様子が気になり、揺れの中を外へ出た。

職場から150mほど離れた家に向かって、揺れの中を走った。若い男たちが津波を見に行くために、防波堤も何もない海辺に向かっていった。

家は積んであったおひつが落ちる程度だった。のんびり布団に座っているおばに「津波が来る。自分はまた戻るから、それまでに着替えをしときなさい」と伝えた。

おばの安否を確認した後、元帳を確保するために銀行へ戻った。他の行員はみな、自分の担当する元帳や手形を持ちながら山の上に避難していった。

元帳を持って家へ戻り、２階で自分の通帳や主人の遺影を探していた時「ゴオー」とものすごい音がした。おばを立たせて表へ出て、高台へ避難するために走った。

体の悪いおばが道ばたに座り込んだ時、道の脇にある溝を水が上がってきた。近所の若い女性がおばをおぶって、高台のお寺まで連れて行ってくれた。

高台のお寺まで来たが「まだ津波が来るような気がする」と思って、さらに高所にある小学校までおばを避難させた。

津波を見るために途中まで戻ったところ、ものすごい土煙のなかで潮が引いていくところだった。

夕方になって波が引いたので戻ると、家の屋根が見えた。自分の家が残っていると思ったが、他人の家が自分の家の場所に流れてきただけだった。

母は、孫２人を連れて墓参りに行く途中で地震にあった。石山と海に挟まれた山道で、石がどんどん落ちて「海へ飛び込もう」とも思ったが、奇跡的に無事だった。

川沿いにまっすぐ逃げた農協の職員、荷物の準備にとまどった郵便局の職員が亡くなった。銀行員は山に逃げたために全員無事だった。

高台に住む行員の家を借りて、銀行は営業を再開した。金庫は流れて道に転がり、中のお金は流れてしまったが、元帳が無事だったため再開までは早かった。

家の物は全部流され、布団は水と砂で染みてしまった。アルバムを流されたことが一番残念だが、いくつかは田んぼに流されていて知り合いが拾ってくれた。

地震から2年後、南海地震が起きた。揺れも被害も小さかったが、津波で家が数メートル流されたため、近所の人と丸太を下に敷いて引っ張って元通りにした。

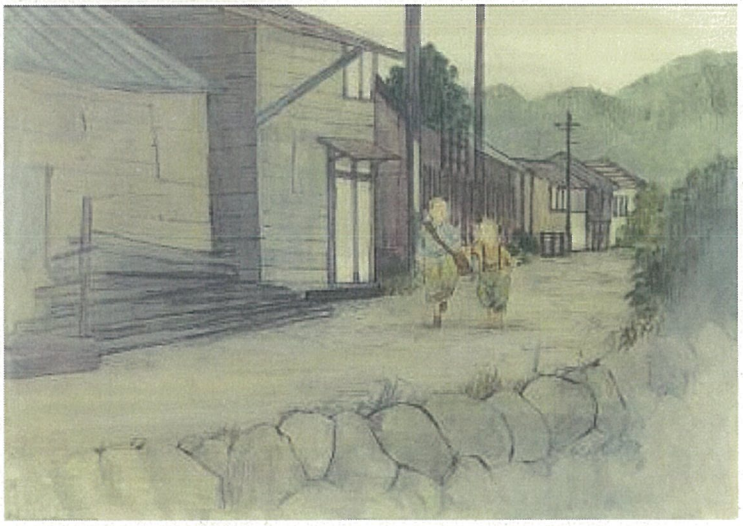
５年ほどして仮設住宅を出て、ようやく新しい家を建てて住むことができた。しかし、物価上昇の中で、その後の改装費用も入れて多額の借金を抱えることになった。

（絵：藤田哲也）

南牟婁郡南輪内村賀田で被災したＪさんの体験

外で友だちと遊んでいると、沖の方から「ごおーっ」と地鳴りが聞こえた。その数秒後に「だだだだだーっ」とものすごい揺れがやってきて、立つこともできなかった。

揺れが収まると、弟が「学校へ行きたい」と言ったため、海辺にある家ではなく高台にある小学校へ向かった。当時は津波のことは何も知らなかった。



学校には大勢の人が避難していた。突然、おじいさんが「津波がくるぞー」と叫んだ。入江を見たら、湾の潮が全部引いて、どす黒い波がこちらに押し寄せてきた。

津波は家などを壊して土煙をあげながら、奥へ奥へと押し寄せていった。津波は何回も来て、津波同士がぶつかって波柱が立った。第３波が一番高かった。

母は位牌と貴重品を風呂敷に包み、家を出ようとした時に津波に流された。６歳の娘の手をしっかり握っていたが、一番大きな第３波の時に手を離してしまった。

母は泳げなかったが、津波でガレキに押し挟まれたため、引き波で体をもっていかれることなく助かった。兄は松の木にしがみついたまま気を失っていた。

日が暮れるころ、学校で母と兄に再会することができた。母の顔を見た途端、こらえていた気持ちがいっぺんに出て泣き崩れてしまった。

朝から夜まで妹の捜索は続いた。妹が着ていた服は竹やぶで見つかったが、１週間後、沖合100mのところで妹の遺体が見つかった。

津波から１０日後に合同葬を行った。地震後に一緒に学校へ避難した人も、位牌を取りに帰って津波で亡くなった。水死体なので当時は火葬にはできず土葬した。

地震から２年後、南海地震が起きた。海辺に建てた仮設小屋はみな流されてしまったが、自分の家は高台に建てたために被害にあわずに済んだ。

（絵：阪野智啓）

南牟婁郡新鹿村で被災したＫさんの体験

長くつづく地震の揺れの中、村の中心部の世帯簿を持って高所に向かった。立派な石垣から石がぽこんぽこんと飛び出してきたのを必死によけながら避難した。

別の高台に避難した小学生の安否を確認するため、軍隊帰りの兄が手旗信号で連絡をとった。しかし小学校の先生は、詳細を伝えるため山を迂回して直接やって来た。

海の近くにある役場は、建物は残ったものの中身はすべて流れた。厳重に管理していた戸籍簿も無くなり、一から作り直すことになった。

翌日、小学校の教室を役場にして業務を開始した。戦争で若い男がいなく、年寄りと若い娘だけで、津波の対応と日常の業務を両立させることは大変だった。

県の地方事務所から支援物資が送られて、校庭に山積みになった。物資の質・量ともに偏りがあったため、公平には分配できず町内会長同士でケンカになった。

夜は支援物資を守るために、消防団が夜警をした。戦時中の物資不足に津波が重なったため心が荒んだ人々もでてきて、自分の家でもサツマイモが盗まれた。

（絵：阪野智啓）

南牟婁郡新鹿村で被災したＬさんの体験

体育の時間で運動場にいた。突然ゴーッという音がして地面が揺れ、立っていることができず、這いながら桜の木にしがみついて揺れが収まるのを待った。

父兄が「早く逃げろ」と手ぬぐいを振り回して叫んだが、山間部出身の校長は意味がわからず校庭で訓話を続けた。子どもたちは早く逃げたくてモジモジしていた。

「津波だ」と言う声で、たまりかねた教頭の誘導で高台まで避難した。低学年を先頭にしたが途中で高学年が抜いて、到着する頃には列をなしていなかった。

第１波が引くと、赤藻で真っ赤な海の底が見えて不気味だった。それから10分か15分かすると第２波が押し寄せ、海辺の集落の半分以上の家を押し流していった。

津波は20～30分間隔で、6～7回繰り返して来た。第２波と第３波が大きかった。集落の２本の川から津波が引くとき、湾の中央でぶつかって、水が立ち上がった。

津波が収まると、父兄が子どもを引き取りにきた。しかし、自分の家は流されてしまい、家族も一向に現れず、不安で心細かった。夕方も遅くなったころ、ようやく母方の叔父が「皆、無事だから安心しろ」と迎えにきてくれた。

（絵：藤田哲也）